

# 研究推進校事業報告書

## <取組と成果のポイント>

- ・「道徳科の目標」を達成するための、「道徳の時間」における「指導方法」について研究した。
- ・指導方法の工夫として、「体験的な学習（役割演技・動作化）」「問題解決的な学習」に取り組んだ。
- ・「役割演技」を行うためには、ねらいを具体的にし、「役割演技」をする子ども（演者：主役と相手）だけでなく、その様子を客観的に見て、肯定的に受け入れる一般の子ども（観客）、演者と観客をつないだり、演者が演技をしやすくしたりするための担任（監督）が必要である。また、演者は、演じる登場人物の気持ちや背景を十分に把握した子どもたちに行わせた。しかし、相手役を子どもにさせることが難しい場合は、大人（担任以外の教師や保護者）に行わせた。
- ・「展開の前段」終了時に「学んだこと（資料から・主人公から）」を取り入れることで、「展開の後段」における「自己を見つめる」ことにスムーズにつなげていけることができた。
- ・「自己を見つめる」際には、書く作業を取り入れ、十分時間を与え、担任が把握し、多様な考えを発表させた。中心発問に対して、答えにくい場合も、書く作業を取り入れた。
- ・以上の取組を行うことで、各教師が道徳の授業についての理解を深め、意欲をもって取り組むことができた。同時に、取り入れた様々な手だてや工夫により、子どもたちは、常に自分の考えをもち、喜んで日頃の道徳の時間に取り組むようになってきた。さらに、授業の中で、自己をしっかりと見つめ、自らを振り返ることができるようになってきた。

## 1 研究推進校の概要

学 校 名	所 在 地	電 話 番 号	児 童 数	備 考
一宮市立小信中島小学校	一宮市小信中島字南平口59	0586(28)8735	679人	

## 2 研究課題

- (1) 「道徳の時間」の指導の工夫
  - ・学習指導要領の趣旨や「特別の教科 道徳」を意識した授業づくり
- (2) 「道徳の時間」における評価の工夫
  - ① 道徳性の成長を促す評価方法
  - ② ①を活用した長期的な評価

## 3 研究主題とその設定理由

「子どもを捉え、よさを伸ばす『道徳の時間』の在り方」

— 「特別の教科 道徳」に向けての授業づくりと評価方法の研究 —

本校は、「たくましい子、心豊かな子、学ぶ子」を校訓とし、「知・徳・体の調和のとれた、未来を拓（ひら）くたくましい小信っ子を育成する」を教育目標としている。

特に徳育の面では、

○豊かな体験活動を展開する。

- ・発達段階に応じた「キャリア教育」を推進する。
- ・ESDの視点に立った学習指導を進める。

○共感的な人間関係を基盤とした生徒指導を推進する。

- ・学校や学級が、子どもたちにとって安心や喜びのある場となるように努める。
- ・「子どもを捉え、よさを伸ばす『道徳の時間』の在り方」を研究する。

これらに重点を置いて、教育活動を進めている。

本校は、児童数679名、教職員41名の中規模校である。学校の西方面は、この地域の特色である昔ながらの「のこぎり屋根（織物工場）」の家が多く残り、三世代同居の家庭が多い。他の方面には、マンション、アパート、一戸建てが増えてきている。南には大きな道路があり、大型店が並び、交通量も多く、学校の東には「尾西緑道」という公園がある。この公園は、この地区を流れる宮田用水を緑道として整備し、人と緑と水の触れ合い、自然と交流できる散歩道として多くの市民に利用されている。また、約230本のソメイヨシノの桜並木が約1kmにわたり続き、自然に恵まれた場所である。本校はこのような環境の中に位置している学校である。

小信中島連区には、「児童育成連絡協議会」「地域づくり協議会」「社会福祉協議会小信中島支会」「町会長会」「老人クラブ」「女性の会」等の多くの組織があり、各会の長が「児童育成連絡協議会」の顧問や理事等になり、町内全体として子どもたちのための取組・行事等を行っており、たくさん子どもたちが行事等に参加している。また、学校で募集している登下校ボランティアの登録者も増えてきており、登下校時に通学路に立って子どもたちを見守るなど、家庭や地域全体で子どもたちを育てていこうとする協力的な雰囲気がある。

子どもたちの様子を見てみると、教師に言われたことに対してきちんと守ろうと努力する子が多い。集会などでも、話をする人を見て、姿勢よく話を聞くことができている。しかし、教師の目が離れているところでは、例えば廊下歩行や帰宅後の行動において、態度が悪くなってしまう子もいる。本校の教育における課題はここにある。注意されるからするのではなく、他人に迷惑を掛けていないかということ、自分から考えられる子どもの育成を道徳教育を通して行う必要がある。

そのためには、子どもたちがありのままの自分を見つめ、振り返り、自分の考えを進んで話し、他人の考えにも耳を傾け、それを受け入れた上で更に考え、よりよい学校生活や家庭生活を送っていこうと思うことができるようにしていくことが大切である。

中央教育審議会答申において、「特別の教科 道徳」の実施に当たり、「特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたず、言われるままに行動するように指導したりすることは、道徳教育が目指す方向の対極にある」とある。道徳教育において、自らよく考え行動できるような子どもの育成を求めている。

そこで、本校の実態を鑑みながら、「道徳科」の趣旨や目標を踏まえ、「道徳の時間」における指導の工夫や評価の工夫を研究の柱として、子どもたちのよさを伸ばしていけるような指導の在り方について考えていくこととする。

#### (1) 「道徳科」における取り組み

今回の学習指導要領の一部改正により、指導に当たり「主体的に学習に取り組む」「問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習を適切に取り入れる」、また、教材について「物事を多面的・多角的に考える教材の開発や活用」といったキーワードや新たな趣旨が目標や配慮事項に加えられた。これら能動的な学習を「道徳の時間」に取り入れて授業改善をすることで、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育て、子どもたちのよさを伸ばす「道徳の時間」としていきたい。

#### (2) 「道徳の時間」と評価改善

能動的な学習を取り入れた「道徳の時間」に取り組む場合、パフォーマンス評価やポートフォリオ評価など多様な評価方法が必要になる。このような評価に取り組むことで子どもたちが自己の心の成長を実感できるようにしていきたい。

### 4 研究の概要及び特色

#### ○ 道徳科の指導過程の各段階について

一般的には、「導入」「展開」「終末」の各段階に区分し、「展開」を「前段」と「後段」に分ける場合が多い。説明する上で、「導入」「展開」「終末」「展開の前段」「展開の後段」という言葉を用いることとする。

#### (1) 「道徳科の目標」を達成するために

##### 道徳科の目標

よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

本校の教師は、道徳科の重要性は十分に理解している。しかし、学習指導要領の道徳科の目標や道徳科の特質から、道徳の時間の現状を鑑みると、展開の後段に当たる、価値の主體的な自覚が十分に機能していないため、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度が十分に育っていなかった。

その原因として、「展開の前段」で読み物資料を扱ったときの子どもたちの「価値理解」の高まりが、「展開の後段」で行う「主體的自覚」の段階で下がってしまったり、「経験を想起すること」にうまくつながっていかなかったりしていることが挙げられた。

そこで、本校では、これらに対する解決策として、「展開の後段」での工夫として、(※)「学んだこと(資料から・主人公から)」の取り入れや「役割演技」に取り組んだ。

(※)「学んだこと(資料から・主人公から)」の取り入れ

前段における資料の扱い後、「この資料(主人公)から学んだ(大切な)ことは何か」と問い掛け発表させることで、後段における「自己を見つめる」ことにスムーズにつなげることができる。

さらに、「展開の前段」で資料について考えるときに、単に資料の中の出来事で終わってしまい、道徳的価値を自分の問題として捉えられないことも多々あった。

そこで、本校では、自分の問題として捉えることができるように「問題解決的な学習」にも取り組んだ。

「学習指導要領解説 特別の教科 道徳」にも、「多様な方法を取り入れた指導」として、「問題解決的な学習」や「体験的な学習」(「役割演技」も含む)などの工夫が示されており、これらを取り入れていくことには意味があると考えた。

(2) 「役割演技」を「展開の後段」に取り入れることについて

「役割演技」は、登場人物の心情に、より一層共感させることができる。他人から教えられた知識ではなく、自分で直接に感じ取ることができる場所に「役割演技」のよさがあり、「実感による理解」が子どもたちに生じる。

導入する場面は、一般的には「展開の前段」で「中心発問」を設定し、その「中心発問」の場面であることが多いが、本校では、「役割演技」を専門的に研究されている「上越教育大学 教職大学院 早川裕隆教授」の指導を受け、本校の課題である「展開の後段」を機能させるため、「展開の前段」だけでなく、「展開の後段」でも「役割演技」を積極的に取り入れる研究を行った。

「展開の後段」に、資料にはない特別な場面を設定し、登場人物の役割演技をする。また、「役割演技」をする演者二人とは別に、担任は演者と観客である子どもたちをつなぐ監督の役を担う。このような形で「役割演技」を導入することで、「展開の前段」で高められた価値観にじっくりひたらせたり、道徳的価値に対する理解を更に深めさせたりすることができ、道徳的価値に対する自覚につなげることができた。

一般的段階		一般的(本校でも研究)	本校で特に研究
導入			
展開	前段	<b>役割演技(中心発問において)</b> ・主人公の気持ちにより共感させることができる	
	後段		<b>役割演技</b> ・役割演技を通し、「演者」も「観客」も、より道徳的価値の自覚を深められることができる
終末			

(3) 道徳科における評価について

毎時間子どもたちが書いたものを評価の参考にする。「展開の後段」や「終末」に、その時間に見つめた価値について、深まったこと、自分の経験、今後の自分などについて書かせた。

(4) 研究課題に関わる取組

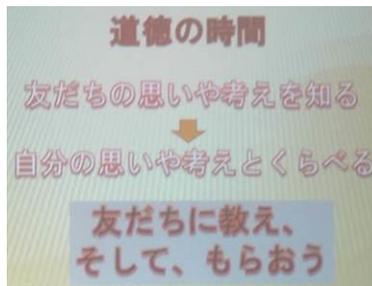
① 道徳教育推進教師による模範授業

1回目

主題名「あきらめない心」A—(5) 希望と勇気、努力と強い意志  
資料名「二十五メートルのかべ」(出典 愛知県教育振興会発行 「明るい心」)

○ 主人公に共感させ、自己の在り方を自分自身との関わりにおいて捉える道徳の授業を行った。

**助言**・「展開の前段」の最後に「この資料(主人公)から学んだことは何ですか」という発問を入れることによって、「展開の後段」の「価値の主體的自覚」(高められた価値観をもって、自己を見つめる【自分の行為や心を振り返らせる】こと)にスムーズにつなげることができる。



2回目

主題名「きまりはどこまで必要か」C—(12) 規則の尊重  
資料名「シンガポールの思い出」(出典 文溪堂 「5年生の道徳」)

○ 問題解決的な学習を取り入れた道徳の授業を行った。

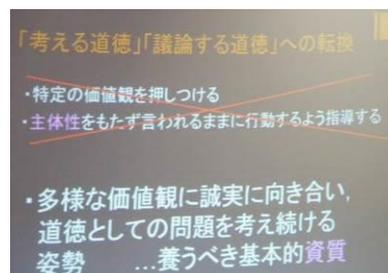
**助言**・道徳的な課題に対して、自分との関わりで見つめ、自ら判断し、考え、話し合わせることで、子どもたちが自己の生き方について主体的に考えることができる。



② 講師を招いての勉強会【「特別の教科 道徳」と「役割演技」】

1回目 大学教授(上越教育大学教職大学院 早川裕隆教授)を講師に招き、講義を受けた。

**助言**・ねらいを具体的につくることで、評価もしやすくなる。  
・心情に訴える「役割演技」の工夫が大切である。



## 2回目【役割演技のシミュレーション授業】

○ 早川教授を講師に招き、役割演技のシミュレーション授業を行った。

- 助言**・中心発問の場面で「役割演技」を取り入れるのではなく、「展開の後段」に、資料にはない特別な場を設定して、登場人物の役割を演じさせる。高められた価値観に浸らせることで、道徳的価値に対する理解を更に深めさせることができる。
- ・役割演技の適切な方法として、「役割演技をする演者二人とは別に担任は監督役を行うのがよい。監督（担任）が、演者と観客（見ている子どもたち）をつなぐ。演者が演じた後、観客に演者の様子を見て感じたことを言わせる。その後、演者に気持ちを語らせる。」



「二わのことり」...小学1年生を例にして

**前提として**

- ①中心発問で役割演技を取り入れる構想を
- ②役に「なりきる」ことは求めない

<目的>  
資料に描かれている状況を子どもたちが上手に演技して（忠実に）再現することではなく、相互関係を演じながら新たな役割を創造し、そのよさを実感的に理解すること

演じられた後に、誰に何を聞く

**【観客】**  
・共鳴板であり、客観

**【演者】**  
・具体的な言動を話題にするところから

### ③ 研究授業と講師を招いての研究会

**5年** 体験的な学習（「展開の後段」で、役割演技を取り入れた授業）

主題名「相手の立場に立って」B-（7）親切 思いやり  
資料名「くずれ落ちた段ボール箱」（出典 文溪堂 「5年生の道徳」）

- 助言**・「役割演技」や中心発問を行う場面として、資料のどこが適しているかは、ねらいによって決まってくる。
- ・「役割演技」を行う子は誰でもよいわけではなく、登場人物をよく理解した子が行う。あらかじめ決めておく場合と授業の中で作る場合がある。授業の中で作る場合は、登場人物の気持ちをよくつかんで、発言できた子にするとよい。



1年 体験的な学習（「展開の後段」で、「役割演技」を取り入れた授業）

主題名 「素直にのびのびと」 A-（2）正直、誠実  
資料名 あのね（出典 東京書籍 道徳1 みんな なかよく）

- ※ 主人公の気持ちや状況を十分把握させるために、分断して資料を読んだ。
- ※ 演者の相手役を大人（担任以外の教師）で行い、主役を役割演技する子が即興的に演技しやすいようにした。

- 助言**
- ・観客が演者の様子をよく見えるようにするには、全員前向きの座席にする方がよい。
  - ・低学年における「自己を見つめる」行為は、これまでの自分を振り返る行為でもあり、これまでの経験があまりないこと、思い出しにくいことなど発達段階での問題から難しさが伴う。低学年は、道徳科の目標の前半「価値理解」に重点を置き、高学年になるにしたがって、後半の「自己を見つめる」ことに重点を置くとよい。



④ 視察における公開授業

2年 体験的な学習（「展開の前段」で、動作化を取り入れた授業）

主題名「思い切って」 1-（3）勇氣  
【A-（5）は、「希望と勇氣、努力と強い意志」となり、今回のねらいからはずれてくるために、旧の内容項目で表記する】  
資料名「ピンクいろの花（出典 文溪堂 「2年生の道徳」）」

- ※ 主人公に共感させ、自己の在り方を自分自身との関わりにおいて捉えさせた。
- ※ 動作化であっても、見ていた子どもたち【観客】に、演者の表情から気持ちを想像させた。その後、演者に演じながらどんな気持ちになったか、その後どんなことを思ったかなどを発表させた。

4年 体験的な学習（「展開の後段」で、役割演技を取り入れた授業）

主題名「失敗を素直に認め、正直に」 A-（2）正直・誠実  
資料名「わすれ物（出典 愛知県教育振興会発行 「明るい心」）」

- ※ 主人公に共感させ、自己の在り方を自分自身との関わりにおいて捉えさせた。

6年 問題解決的な学習

主題名「きまりはどこまで必要か」 C-（1 2）規則の尊重  
資料名「シンガポールの思い出（出典 文溪堂 「5年生の道徳」）」

- ※ 道徳的な課題に対して、自分との関わりで見つめ、自ら判断し、考え、話し合わせることで、子どもたちに自己の生き方について主体的に考えさせた。

## 意見交換による指摘事項

- ・「役割演技」の後、見ていた子どもたち【観客】に、演者の表情から気持ちを想像させることは、日頃の生活の場で人の気持ちを考える際にも効果的に働く。
- ・問題解決的な学習を取り入れた授業において、「なぜそう思ったのか」という理由を交流し合うことは、自分の考えの変容につながる有効な手だてである。



## 5 研究の評価

### (1) 研究の成果

#### ① 「道徳科の目標」を達成するために

##### ア 「学んだこと（資料から・主人公から）」の取り入れについて

本校において、「道徳科の目標」の中でまずねらったことは、確実に「自己を見つめる学習」を成立させることであった。そのために、資料を扱った後に「この資料（主人公）から学んだ（大切な）ことは何か」という発問を取り入れ、子どもたちに答えさせることで、スムーズに「自己を見つめる」ことができると考えた。

今回、「自己を見つめる」ことができた子どもたちは、5・6年生では9割以上、3・4年生では6.7割、1・2年生では1.2割であった。

今回の実践において、「学んだこと」を取り入れ「自己を見つめる」ことにスムーズに近づけることについては、学年が上がるほどうまくできるようになることが分かった。

##### イ 「役割演技」の取り組みについて

「役割演技」の適切な方法を学んだことで、演者も観客も、登場人物の心情に、より一層共感させることができた。

#### ○役割演技の在り方

ねらいの達成のために、

- ・観客【見ている子ども】を育てる
- ・適した人【登場人物の心情をつかんでいる子ども、担任以外の大人】にさせる
- ・監督【担任】が上手に導く

また、「演者」の相手役を大人が行えば、1年生でも役割演技ができることが分かった。

さらに、教師は、ねらいを具体的に決めることで、その達成のためにどの場面でどんな「役割演技」を行うとよいか分かるようになってきた。

##### ウ 「問題解決的な学習」について

道徳教育推進教師が5年生の授業で「問題解決的な学習」の手本を示し、3年生以上の担任が「問題解決的な学習」に取り組んだ。道徳的価値を自分の問題として捉えやすくなり、生き生きと活動する子が多く、子どもたちは主体的に取り組むことができた。

#### ② 「役割演技」を「展開の後段」に取り入れることについて

「展開の後段」に、資料にはない特別な場面を設定し、「登場人物」の役割演技をすることは、1年生でも可能であり、「演者」も「観客」も、高められた価値観にじっくり浸らせることができた。

「展開の後段」や「終末」の感想では、1年生であっても、これまでの道徳の授業のときよりも、しっかり考えて書くことができた。高学年においては、9割以上の子どもたちが、見つけた価値について、深まったこと、自分の経験、今後の自分などについて書くことができ、

じっくり「自己を見つめる」ことにつながり、この取組はとても有効であった。

③ 道徳科における評価について

毎時間、「展開の後段」や「終末」に、その時間に見つめた価値について、深まったこと、自分の経験、今後の自分などについて書かせ、評価できるようにした。時間を十分確保したことで、どの子もよく考え書くことができた。

教師はその時間内に、子どもたちの気持ちを把握でき、その場で発表させたり、紹介したりすることができた。そして、子どもたちがそれを聞いて、自分の考えをより明らかにしたり、他者の違う考えを知ったりして、さらに自分を見つめることができた。

教師は、子どもたちの書いた内容が「単なる感想」か「自己を見つめたこと」なのかをチェックし、感想しか書けていない子には、自分について書くようにアドバイスをを行った。そのことで、より多くの子どもたちに、自己を見つめさせることができた。また、チェックして指導したり、子どもたちが見つめた内容をつかんだりすることで、自分の授業がうまくいったかを判断し、次に取り組む授業への意欲へとつながった。

(2) 今後の課題と取組

① 「道徳科の目標」を達成するために

1・2年生では、「経験がない」「結び付かない」「思い出せない」等により、自己を見つめ振り返らせることができた子どもは数名しかおらず、発達段階での差が表れたように感じる。こうした実態から、発達段階の差をそのまま受け入れて、低学年は、目標の前半の「道徳的諸価値の理解」を主に、高学年になるほど目標の後半の「自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深めること」に重きを置いて取り組んでいくようにしていきたい。

しかし、1年生の取り組みにおいて、「自分だったら」という言葉を使って、「展開の後段」や「終末」の感想を書かせたときには、多くの子どもたちが「自己を見つめる」ことができた。今後、低学年においては、「自分だったら」など具体的な言葉を始めに付けて書かせる必要性についても、研究を深めていきたい。

「役割演技」を行う際に、担任として、「演者」と「観客」をつなぐ「監督」の役を担うことは、なかなか難しい。今後も「演者」の表情をよく観察して解釈することを常に意識し、実践を積み重ねていく必要がある。

② 「役割演技」を「展開の後段」に導入したことについて

「展開の後段」における、資料にはない特別な場面を設定することについては課題が残った。どんな資料で、どんな設定をすればよいかを検討し、さらに指導例の蓄積と指導案の作成もしていきたい。

③ 道徳科における評価について

「展開の後段」や「終末」では、1時間を振り返って、この時間に見つめた価値について、深まったこと、自分の経験、今後の自分を書かせ、本人・教師にとってのその時間の評価の材料となるようにした。また、今後、自己を見つめ、過去を振り返るときの参考になるようにした。

しかし、低学年では、多くの子が読み物資料の感想になってしまった。感想しか書けなかった要因として、「自己を見つめることができたのに、『展開の後段』や『終末』に書くとき、それをどう書いていいか分からなかった」「扱った価値が、その子にとっては、まだ見つめられないものであった」「授業のねらいや展開、扱った教材等がその子には合わなかった」「展開前段において、主人公の気持ちに十分共感させられなかった」等、いろいろ考えられる。中・高学年であっても、「自己を見つめる」ことができなかつた子にとっては、これらの要因の可能性もある。発達段階、個人差等をどう捉えていくかが、今後の研究の課題である。

今回の研究においては、「子どもたち自身が、過去に書いたものを見て、自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深める場」の設定を、各担任に任せる形になってしまい、書いたものを活用し、子どもたち自身に「自己の生き方についての考えを深める努力」を振り返りさせる取組は、十分にはできなかつた。

毎時間書いたものを学年ごと綴じ、それを子どもたちが読み返す機会を作ったり、道徳の時間の中で扱った同じ価値について読み返させたりするなど、学校としての方針をしっかりと決めて取り組んでいきたい。